

模倣と共振への芸術的アプローチ：

発達障害研究による身体イメージのアナザーモデルの構築

Artistic approach to imitation and resonance:

Consideration of an another model of a body image by a developmental

村上 泰介[†]

Taisuke MURAKAMI

1. 研究の背景と目的

本研究は発達障害—主に自閉症スペクトラム—の研究を通して私たちの身体イメージを考察することを狙いとしている。自閉症は“対人相互的反応”に問題を抱える障害である。対人相互的反応は社会性の根底をなす能力で、模倣の能力の発達が深く関係している。定型発達では、新生児模倣やミラーニューロンシステムの研究事例から、模倣の能力の一部は生得的であると考えられる。一方、自閉症は模倣が困難で、そのために自己の身体イメージが安定せず感覚の統合などに問題を抱えている。しかし、自閉症は、対人相互的反応に依存しない模倣を発達させることで独自の身体イメージを獲得している可能性があるのではないかと、本研究では自閉症の芸術的活動の調査を通して、これまでとは異なる身体イメージのモデル構築を目指す。

2. 発達障害と模倣

自閉症児の中には、他者に「バイバイ」と手を振るとき、手のひらを内側に向ける児童がいることが報告されている。この状況を当事者が表現した文章がある。

「小さい頃「バイバイして」と言われても、僕は自分の方に手のひらに向けて振っていました。体操やダンスなども、どんなに簡単な振り付けもできませんでした。それは、真似をすることが難しかったからです。とにかく自分の体の部分がよく分かっていないので、自分の目で見て確かめられる部分を動かすことが、僕たちの最初に見える模倣なのです。」

(東田直樹 (2007) 下線は筆者)

上記の文章には、自閉症児が抱える対人相互的反応の問題がよくあらわれている。感覚の統合がうまくいかず、そのため自然な身体的反応による他者とのコミュニケーションができず、たいへんもどかしい思いを抱えていることが想像される。このような自閉症の模倣の困難を考察するうえで筆者は、自閉症の感覚と身体の発達段階における困難に着目して研究を進めている。

3. ダンスセッションの事例

本研究では、福祉施設(財団法人たんぼの家アートセンター-HANA)で実施されているダンスワークショップに参加する自閉症の成人男性 A 氏とジャワ舞踊家(以下舞踊家)

家)とのダンスセッションを対象に調査を進めている。ダンスは即興で、A氏は舞踊家の身体動作を模倣しダンスを成立させている。ここでは或る日のダンスセッションをもとにA氏の模倣についての考察を述べたい。ダンスセッションの始まりは、多くの場合舞踊家がA氏に注意を向け、その身体の一部に触れるところからはじまる。この日は、二人が寝転んだ状態で足の裏を触れ合わせる状態になる[図1]。



図1 足の裏を触れ合わせ身体動作を真似し合う

この状態では、双方の押し合う力によって互いの身体の間で平衡状態が生まれているように感じられた。しばらくお互いが押し合う状態が続いた後、舞踊家が身体をひねり始める。ひねる動作が足の裏から伝わったのだろうか A氏も身体をひねりはじめる。そこからは、身体の一部を触れ合わせながらお互いの身体の模倣が続いていく[図2]。



図2 身体の一部を触れ合わせながら起き上がる

やがて舞踊家とA氏とのダンスセッションは自然に終了した。舞踊家が、他の人とのセッションに入り、A氏に向けていた注意を逸らしたためである。その後、A氏は寝

[†] 愛知産業大学 Aichi Sangyo University

転がったまま、くつろいだように見える状態になった。興味深い出来事があった。スタッフの身体が偶然に A 氏の足先に触れたときのことだ。足先に他者の身体が触れた瞬間、それに A 氏は反応し身体を動かした。そして、スタッフを避けるように A 氏は身体を動かさしはじめた[図3]。



図3 他者を避けるような動き

しかし、B さんを避けているように見えた A 氏のその後の行動を見ていると、違う見方が可能であることに気づいた。A 氏は、さらに身体を動かす続け、ちょうど B さんと点対称になる位置で静止したのだ[図4]。



図4 他者と対称になる

舞踊家以外の他の参加者とはコミュニケーションをもたないよう見えた A 氏は、参加者の空間的位置や姿勢などを模倣している。舞踊家と参加者が創り出すダンスの場には大きな流れやリズムが感じられる。A 氏の模倣は対人相互的反応のみによるのではなく、こうした流れやリズムそのものへの模倣も含むのではないだろう。

4. まとめ

「かなり遠い過去においては、天空の出来事も、模倣することができる」とみなされていた出来事に数えられていたということだ。舞踏や他の礼拝的な催しにおいては、そのような模倣を生み出したり、そのような類似性を操ったりすることもありえた。(ヴァルター・ベンヤミン (1933))」とヴァルター・ベンヤミンは模倣の能力を語っている。自閉症の身体イメージは定型発達のそれと異なることは明らかであろう。しかし、現在の健常と呼ばれるコンディションの身体イメージを成立させている模倣の能力は、ヴァルター・ベンヤミンが指摘するように、人間が本来持ち得た能

力には及ばないのではないか。自閉症の身体イメージへの考察を通して、人間の模倣の能力のうち対人相互的反応による発達以外の要因への研究を深め、そのパターンを知る事で、現代の環境が見落としている要素をあきらかにし、そうした環境における身体イメージを再考したい。

舞踊家と A 氏との模倣において特徴的なのは対称性による関係性である。筆者は上記とは別の福祉施設において自閉症の B 氏の創作活動[図5]について知る機会を得た。その制作方法は任意の画面の角からレ点を描き続け、画面の中ほどまで描くと、中心からくりと画面を回転させて、またレ点を描き続けて画面を構成するという手順で描きあげられる。ここでも対照的な世界認識が見られる。こうした特徴的な世界認識をもとに、自閉症の身体イメージを考察することで、感覚統合によらない対称性の維持による自己定位を実現した身体イメージを構想できると考えている。

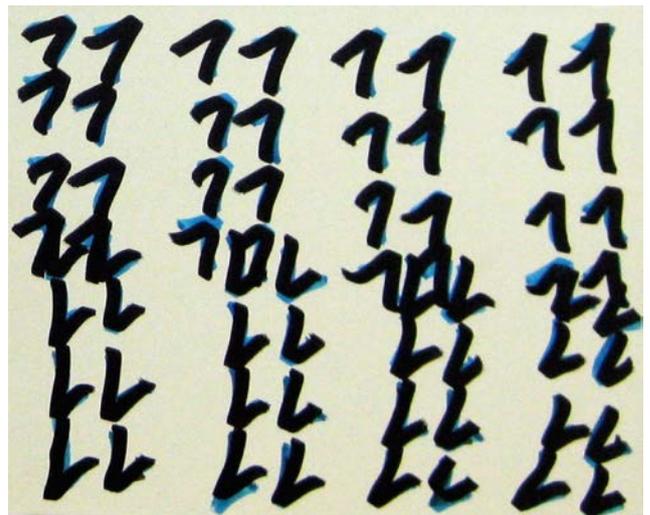


図5 対照性のある描画

謝辞

本研究は JSPS 科研費 26370185 および公益財団法人幸財団の助成を受けたものである。また、財団法人たんぼの家アートセンター HANA と舞踊家の佐久間新氏、自閉症の A 氏、その他多くのスタッフの協力を得て研究は進められている。ここに深く感謝いたします。

参考文献

- [1] 杉山登志郎, 発達障害の豊かな世界, 日本評論社, p. 36, 東京, 2000
- [2] 東田直樹, 自閉症の僕が跳びはねる理由, エスコアール, 東京, 2007
- [3] ヴァルター・ベンヤミン, 模倣の能力について, ベンヤミンアンソロジー, 河出文庫, 東京, 1993